

女子部高等科1年 読書

『教育三十年』からの学び—『田舎者は勝つ』を中心に—

Bクラス担当 竹上 尚子

高等科1年は、中等科から進学したAクラスと4月に入学したBクラスがあり、それぞれ『教育三十年』を学んでいる。自由学園に入学して間もないBクラスは、新しく始まった自由学園の生活の中で、緊張感と新鮮な驚きを持ちつつ、羽仁もと子著作集を学んできた。

1学期は教育三十年以外の著作から「打てばひびく」「臨機応変」「明窓浄几」など、女子部の生活に深く関連ある文章を読み、また『教育三十年』からは「団体と個人」を読みその関係について話し合った。2学期に「田舎者は勝つ」「靴をそろえてぬぐ自由」などを読み進めてきた中で、報告会では「田舎者は勝つ」を取り上げたいとの希望が多くあがり、再度読み直し考え合う機会を持つことができた。当日は、Bクラスの13人全員が報告のステージに立ち、学びの発表を行った。

I. はじめに

自由学園の教科としての「読書」は、特色ある授業の1つである。自分の好きな本を選んで読むスタイルの、一般的に知られる「読書」とは異なり、自由学園女子部では学年単位で、羽仁もと子著作集や名著（トルストイの民話や内村鑑三の講和集）といわれる文章をテキストとして学んでいる。

創立者の思想が書かれている著作集の学びは、学校の建学の精神の学びでもある。創立されてから90年以上の歴史をもつ女子部の生活には、そうした創立者の願いが散りばめられている。したがって、著作集を読み、自分たちの生活と照らし合わせながら考え、思索を続けていくことは、現在に生きる私たちにとって意義あることといえる。

女子部の「読書」は、中等科1年から高等科3年まで学年に応じた内容のカリキュラムが組まれている。高等科で入学した人たちには、中等科で読む文章を取り入れ、一問一答を行いながら丁寧に説明を加えるよう配慮し、授業をすすめた。

II. 報告会までの学習

4月に高等科から入学した13人（そのうち1人は9月に入学した転入生）とは、まず女子部の生活でよく使われる言葉の出典にもなっている文章を取り上げ、勉強

した。1学期から2学期半ばにかけて読んだ文章は以下のとおりである。

『子供読本』より

「臨機応変」「打てばひびく」「先生はどこにでも」

『若き姉妹に寄す』より

「正直に敗けることのできる人は本当に勝つことができる人です」

『自由・協力・愛』より

「明窓浄几」

『教育三十年』より

「団体について考える」「田舎者は勝つ」「靴を揃えてぬぐ自由」

1学期、希望持って入学した13人の生徒たちは、中学校までとは違う慣れない生活の中で、たくさんの驚きや戸惑い、疑問を覚えながらも学園の生活に慣れようと一生懸命であった。そういう中で読書の時間には、自分自身とよく向き合って考える姿勢がみられた。このクラスの特徴として、意見を出し合い、皆で考え合うきっかけを作れる発言者が数人いたので、一つのことを広げて考える楽しさがあった。またじっくり考えたことを、ノートに感想として素直に書き表す人が多かったので、その都度クラスに紹介し、互いの意見が共有できるよう授業をすすめた。

2学期は、行事と授業時間数の関係から、準備開始のぎりぎりまで授業をおこなった。同じ高等科1年Aクラスは一足先に報告会の話し合いに入っていたが、Bクラスは発表前に一人一人の読みを深め、考える時間をとることも大事と考え、教師主導の授業時間とした。

III. 報告会への準備

準備が始まった11月14日から、リーダー主導(リーダー:山崎浩子、副リーダー:山村愛)で内容考えた。テーマが決まるまでに13人全員が希望を出し合い、議論を重ねていった。今まで学んだ文章の中から「団体について考える」と「田舎者は勝つ」が絞り込まれ、最終的に「田舎者は勝つ」を取り上げ報告すると決めた。その最大の理由は、4月に入学して多くの新鮮な驚きを持った13人にとって共感するところが大きかったこと、また一番印象に新しく興味深かった文章であったことなどが挙げられるであろう。さらに「団体生活をしての学びや自由についての考えも盛り込みたい」と意欲的に意見が出された。ある程度の方向性が決まってからは、Aと合同で内容を確認し合ったりBだけで内容を推敲したり報告文を聞きあったりした。

報告にあたり、各自が読書の学習用ノートを持ち寄って読み返したり、13人が協議を重ねながら議論したりするなかで内容が作られていった。

IV. 報告の内容

報告の内容は(1)「田舎者は勝つ」の要旨(2)「驚き」について(3)現在の生活と感想 という3部構成とし、13人が3つのグループに分かれて全員が発表を行った。以下、報告内容の要約をを記す。

・はじめに (山村)

私達高等科1年Bのクラス13人は、今年度女子部に入学しました。そして学園に入って初めて「読書」という授業に出会いました。授業では羽仁もと子先生の著作集である『教育30年』を中心に、『子供読本』『若き姉妹に寄す』などの著作集から様々な文章を読んできました。始めはただ声に出して読んでいた様子でしたが、回を重ねるにつれて内容を自分たちの生活と繋ぎ合わせ考え、意見をまとめられるようになりました。今日は、今まで読んだ中から「田舎者

は勝つ」について報告します。

(1)「田舎者は勝つ」の要旨

「田舎者は勝つ」は昭和10年、自由学園小学校の卒業式でもと子先生がお話しされたものです。

新しい男子部に他からくる人を田舎者の立場とすると、男子部1回生となる初等部6年生は都会人という立場になる。「田舎者は勝つ」ということが真実ならば田舎者になりたいと本気で思わなくてはならない。

田舎者が田舎から出てきて感じる最初の気持ちは「驚き」である。「驚き」を持っている者は進歩する。自由学園に長くいる初等部6年生が「都会人」となって油断しては大変だ。さらに進歩するためにたくさんの良い深い驚きが大切だ。新しい友達に注意深く接し、心から一緒に生活することによって、必ずいろいろな驚きを発見することができる。

しかしたくさんの驚きを発見しても神様の前では誰もが田舎者であり赤ん坊である。だから他から入ってくる友達を動かすのではなく、知らないことや退歩することと戦えばよい。そして一人ではなく大勢で戦う方がよい。その戦いの最初の武器となるのが「驚き」である。

・「田舎者は勝つ」を選んだ理由

この文章は高等科入学の私たちにとって共感できる点が多く、深く考えさせられました。私たちは中等科入学の人に比べ力不足を感じたり、私たちよりはるかに学園のことを良く知っている下級生に戸惑い、高等科入学ならではの苦労や悩みを抱えながら過ごしてきました。そんな時にこの文章を読み私たちの考え方は変わりました。私たちが学園で学べる期間は短いですが、高等科の3年間でも自ら学びたいという意欲と驚きの心を持って毎日を過ごしていれば、同じように進歩ができると思います。そして田舎者の私たちだからこそ身につけ活かせる力があると気づき、「田舎者は勝つ」を取り上げ、学びを報告することにしました。

(2)「驚き」について

次に「田舎者は勝つ」のキーワードである「驚き」についてまとめました。田舎者である私達は、入学して多くの驚きに出会いました。表をご覧ください。驚いた事柄、何に驚いたかという内容を分類してみ

ると、生活の中にある「文化」と「責任」の2つに分けられると考えました。伝統の中にある学園独特の「文化」についての驚き、自治生活の組織の中で与えられる「責任」についての驚きといえます。ここでは「文化」の中から「明窓浄几」、「責任」の中から「委員制度」と「寮の自治生活」の3つを取り上げ、「驚き」から考えたことを報告します。

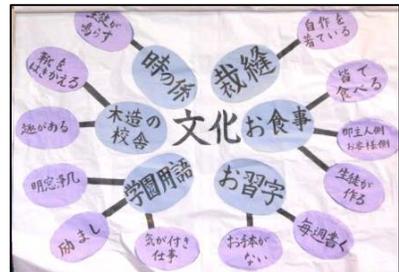
1つ目は学園用語として分類した明窓浄几です。明窓浄几とは明るい窓にきれいな机と書きます。窓にはほこりがなく机がきれいな状態のことを言い、女子部では放課後の教室を見廻り、皆で励んでいます。私は初め明窓浄几という言葉自体に驚きました。そして、なぜ明窓浄几を大切にしているのか分かりませんでした。教室がきれいだと気持ちが良いですが、それだけでしょうか。身の回りの整理整頓をしている時は心が豊かになります。汚い環境では投げやりな気持ち生まれやすいですが、身の回りをきれいにする時、私達の心は丁寧になります。学園は豊かな心を育てる文化をつくり上げ、それを今日まで大切にしているのだと感じました。

2つ目に私達は、各自通っていた中学校と自由学園の委員制度の違いと、そのしっかりとしたシステムに驚きました。自治生活を根元に置いている学園では、委員一人一人に責任が与えられています。中学の時のように適当にやり過ぎてしのげるようなものでなく、いなくても大丈夫という様な人は一人もいません。一人一人の働きが生活の些細なところにまで影響してくるのだと感じています。また、委員制度では一部の人だけでなく、全員が女子部を支える立場になります。私は50日間の委員を経験し、女子部という団体に本気で向き合い、団体のために全力を尽くして行動できる日々はとても貴重なものだと感じました。社会に出た時に、この委員で培った「団体について考える力」はきっと役立つと思いました。

3つ目に寮の自治生活の中で大人がいないという驚きから考えたことについて言います。寮に大人がいないということは、全ては生徒の手に任されているということであり、上級生は下級生の姉や母のような存在です。自治を行うために、当然個人には生活しているだけでいろいろな責任が任せられます。

掃除をする責任、お料理をする責任、朝きちんと起きることさえ個人の責任になります。それらの責任は、自分一人で生活しているのではなく、清風寮という団体の一員であることを教えてくれます。また、大人が共に生活していない環境では私たち一人一人が寮を治めていく自覚を持つ必要があると感じました。

これら3つの驚きを進歩につなげるにはどうしたら良いか考えました。明窓浄几を励むことによって心が丁寧になり、小さな事にまで心を配れるようになります。委員制度では、女子部を下から支える立場になることで社会全体を考える力が育われます。寮の自治生活では本来一人一人が寮を治めていく責任が伴うものですが、現在は形式的になり、自治の自覚が薄くなっていると感じます。皆が従来の型にはまらず寮について考えたら、きっと進歩につながります。ひとつの驚きと丁寧に向き合うこと、それが成長するための一番の鍵だと思いました。



(3) 現在の生活と感想

「田舎者」と聞いて私たちは最初、地方に住み流行にのっていない人をイメージしました。逆に「都会人」は東京に住み、時代の最先端を生活している人をイメージしました。しかし「田舎者は勝つ」の中で言われている両者は私達のイメージとは違うものでした。もと子先生は、地方から東京に出て沢山

の驚きに出会い、疑問を持ち、考え、答えを出していく中で様々な知恵と知識の道を開かれました。同様に、地方から出てきた私達にも同じ可能性があるのでは、と思いました。

私達が入学して間もない頃は、新しい環境で戸惑うことが多かったのですが、自分たちで考え、一つ一つ解決していきました。そのうちに仕事やここでの習慣も身につく、当たり前にならざるを得ないようになり嬉しさを感じました。それは、自分達の成長の確信にも繋がりました。しかし反面、初めのような刺激が薄れて都会人になりかけているのも事実です。今の私達にはもっと進歩すべき道を考える余地があります。現状に満足することなく、視点を変え、互いに議論し合って退歩することがないようにしていきたいです。

また女子部という団体を一人の行動で変えようとするのは難しく、大きな力が必要です。もっとこうしたいという一人の思いをまわりが共感する事で大きな力が生まれると思います。まわりの意見にも敏感になることは私達の進歩に欠かせません。単に驚きをもつだけでなく、驚いたことを考え改善していく大切さを感じています。初心を忘れず、クラスや学園の力になっていきたいと思ひます。

・まとめ (山崎)

団体の一員として生活を送ることは、協調性を身につけられるという利点があります。しかし、ただそこに存在し、まわりに合わせているだけでは新しい考えは生まれません。また進歩することができません。私達のような田舎者が気づいたことをどんどん発信し改善していけたら、良い意味でその循環を崩すことができると思います。固定概念にとらわれず、どんな考えも受け取るつもりで、都会人も田舎者も共に過ごせたら良いと思ひます。

「読書」という授業を通して自分の生活を見つめ直すことができました。もと子先生の体験談や昔話は、私達とは違った視点で取り上げられていて新鮮でした。それらを学園生活と照らし合わせて毎回たくさん意見が飛び交いました。これからも、「読書」を大切に、何事も柔軟な心で見つめることができた方が良いと思ひます。

V. 報告会を終えて

新しい「驚き」を得たという13人は、正直な思いを13分という短い持ち時間の中で報告文をよく推敲し、体験に基づいた内容で発表ができた。勉強の過程では、言葉で表現する難しさを感じながらも、真摯に取り組む生徒たちから得るところは大きかったと思ひている。

報告に使う表については、AB共通に縦書きで、担当を決めて筆で書いた。Bクラスにとっては初めての報告会であるため、Aクラスの係に教わりながら協力して作成した。実際に書く段階では、内容を把握しているBクラスを中心に皆でとりかかった。図表を書き上げたあとのリハーサルで色が薄く見えづらいと判明し、涙をこらえて書き直す事態も起こったが、黙々と最後まで取り組んだ。失敗から学んだことも多々あることと思ひう。

VI. 終わりに

今回の報告会で生徒たちが頭を寄せ合って考えている過程のすべてが報告文に集結しているといっても過言ではない。自分たちの学びをどのように伝えようかと繰り返し話し合った時間は、私にとって新鮮な驚きを得た時間であった。自由学園の生活と勉強がまさに「生活即教育」であると、あらためて認識する機会でもあった。

報告会をするにあたり、Aクラスの指導者である小谷野先生はじめ、担任の先生方にご協力いただいた。ここに感謝を申し上げたい。

VII. 参考文献

- ①羽仁もと子『教育三十年』1950年 婦人之友社
- ②女子部82回生編『羽仁両先生の著作を身近に—二十一編に注釈の試み—』2004年 自由学園出版局

